

AKAによる坐骨神経痛の治療

坐骨神経痛と診断された。 薬物療法で完治するか

Q

五十二歳、男性。三か月前に軽いジョギングをしたあと、右太ももの後ろから足首にかけて筋肉の痛みを感じました。それから三週間後、痛みが増してきたため整形外科を受診し、坐骨神経痛と診断されました。現在は、処方していた鎮痛剤を服用して痛みをやわらげていますが、しびれやこぼり感、また脚を伸ばすと痛むといった症状があります。今後薬物療法を続けていけば完治するのでしょうか。別の治療法がありましたら教えてください。また、日常生活のなかで心がけること（食事や治療に望ましい運動法など）についても教えてください。

(愛知県 K・K)

AKAという診断と治療を兼ねた画期的な方法が発見されました。

AKAとは、正確には「関節運動学的アプローチ」といいます。これは「関節運動学に基づく治療法で、関節の遊び、および関節面のすべり、回転、回旋などの関節包内運動を改善する手段である」と定義される最新の手技による治療技術です。

この技術は、当初、かたくなった関節を治す目的でリハビリの治療法として開発されたのですが、その過程で痛みに対して著しい効果を示すことがわかり、現在では痛みの診断・治療法として知られています。

関節の内部の動きが正常に動かなくなった状態を関節機能異常といいますが、これがかからだの中心部にある関節、たとえば仙腸関節や肋椎関節などにおけると、その関節の周囲ばかりでなく遠く離れた予想もしない部位にまで痛みを生じます。これを関連痛といいます。この痛みはAKAで関節を正常に動くようにするととれてしまいます。

以前、医師にエックス線やMRIなどの画像の変化

坐骨神経痛という病名は、数年前までは、いろいろ検査をしても原因の特定できない腰下肢痛の総称でした。

近年、MRI（磁気共鳴画像）の出現により、それらの多くに椎間板ヘルニアが見られたため、原因が解明されたかに思われました。しかし、逆にMRIでヘルニアなどの異常があっても、まったく痛みのない

仙腸関節の機能異常による AKAによる治療をすすめる

人も多いことがわかってしま、坐骨神経痛をはじめとした腰下肢痛は、再びよくわからない病気となってしまいました。

このことは、手術や牽引などを行っても腰下肢痛の治らない人の多い現実や、この分野に多数の民間療法が繁栄している社会現象からも明らかです。

このように混沌とした運動器の痛みの世界に、最近

によって、椎間板ヘルニアとか脊椎すべり症、脊柱管狭窄症、変形性股関節症、変形性膝関節症といった疾患によるいわゆる関連痛も、AKAでとれることが多く、私の経験では、腰痛、ひざ痛、肩こりなど、整形外科で見られる痛みをともなった疾患の約90%は病名に関係なく改善されます。

したがってこれらの痛みの原因の多くは、画像の變化部位ではなく、その個所とは遠く離れた関節の機能異常が真の原因であることが判明してきました。

いろいろな関節にAKAを行った結果、腰の中心にある仙腸関節は、動きの非常に少ない関節で機能異常をおこしやすく、その関連

痛は、ほぼ全身におよぶことがわかりました。とくに腰下肢痛に関しては、大部分がこの関節に原因があるといっても過言ではありません。

相談者は、脚の力が抜けるなど、神経が本当に障害されている症状がないようですので、仙腸関節原性の痛みがもつとも考えられます。この関節の機能異常が原因で炎症がなければ、数回のAKAで治癒します。

痛みの再発を防ぐには日常生活で関節機能異常をおこさないように、中腰をとらない、同一姿勢を長くしない、疲れをためないことが大切です。運動によって筋力をつけても痛みの治療にはなりません。薬剤は、あくまで対症療法ですので、関節機能異常からくる痛みに対しては、AKAでないと完治しません。

最新治療技術!



回答者
望クリニック院長
住田憲是
(整形外科)